心理臨床と美の背反性
—「偽の美」考—

東　畑　開　人

1．心理臨床と美の背反性

心理臨床学において，美について省みられることはほとんどない。竹田（1997）が述べているように，美とは動物には閉ざされた，きわめて人間的な事象である(1)。それにもかかわらず，心理臨床という人間性の根幹に関わる営みにおいて，これまで美が省みられることがなかったのは一体いかなる理由によるものであろうか。その理由の一つとして，心理臨床という営みの源流にFreudの思想が根深く埋め込まれていることをあげることが出来る。Freudの創始した精神分析は，しばしば深層心理学とも表現されるように，表面に現れた現象ではなくて，その背景に流れる無意識的な力動に焦点を合わせることを特徴としている。それゆえ、表面に現れたものはあくまで深層に至るためのツールとして位置づけられ，それ自体に備わっている価値に関しては焦点から外されるという態度が備わっている。この構造では，事物の表面にしか現象されえない美は，その背景にある深層へと向かうまなざしによって，省みられることのない存在とならざるを得ない。実際に，Freud（1914/1969）は自身が芸術作品を鑑賞する際の心の動きについて「形式上・技巧上の特色—芸術家が第1に重要視するのはいうまでもなくこれであるが—よりも，その内容に一層強くひきつけられることに気付いていた(2)」と述べており，作品の美的価値を評価するのではなく，それを生み出すに至った芸術家の個人的な深層に関心を向けていたことを明らかにしている。Freudの態度に象徴されるような深層心理学の構造において，美という価値が重視されることがなかったのは必然的なことであったと考えられるが，精神分析を含めた深層心理学が，精神病理学としてではなく，臨床学として構想されてきたことを理解するとき，心理臨床学において今まで美が省みられることがなかったことには，さらに深遠な問題が隠されていることに気付かされる。この問題性を端的に明らかにしてくれるのが，表現病理学と芸術療法の対比である。

山中（2003）は芸術療法の歴史を叙述するとき，まずはその前史として病者による芸術をテーマとした表現病理学から始めている(3)。すなわち，芸術療法の誕生以前に，心に関わる学問として，精神障害と表現の関係を問う精神病理学的な研究が盛んに行われており，表現病理学と呼ばれる研究領域が確立されていた。しかし，表現病理学においては，あくまで芸術と精神病者の心の静的な連関が検討されていたのにとどまり，芸術を臨床的な方法として用いるという発想が本格化することはなかった。一方このような潮流とは断絶したところで，心を病んだ人々への援助を行なっていた臨床家の中から，芸術行為が心理臨床の一技法として用いられ始め，後に芸術療法として結実することになる。

表現病理学も芸術療法も，共に「心」を主題とするアプローチと言えるが、両者の美と芸術に対するまなざしは大きく異なる。すなわち，表現病理学においては，狂気と芸術という観点から，

芸術「作品」の美的価値に関心を向けていく流れが存在し，実際にその展開の中で，"Art Brut"という精神病者の作品の美的価値を認める運動が展開されているように，美という現象の意義を認めていく姿勢が備わっていた。これに対して，芸術療法においては，芸術「行為」にこそ臨床的意義があると考えられており，中井（1984）がセラピストの姿勢として，病者の「たどたどしい一本の線と"芸術性"の高い完成画とを『哲学的に対等』とみなす(4)」必要を述べているように，美的価値を積極的にエポケーする必要が強調されている。山中（1999）が「芸術療法」に代わって，「表現療法」という名称を提唱したのも，以上のような態度の重要性にもかかわらず，セラピストが「芸術」という語感から作品に対して美を求めてしまいがちであるという現実に警鐘を鳴らすためのことであった(5)。この対照において重要なのは，「臨床」という人間の心に働きかける営みに対する両者の温度差であろう。すなわち，美を価値として認めていく姿勢を内包する表現病理学においては，それが病理の解明を目的としているように「臨床」という治療的な志向性が薄く，「臨床」を前提として追求している芸術療法においては，美の価値に対する慎重な姿勢が強調されている。以上のような美の位置づけの違いから，美と心理臨床の間には互いに否定しあうような背反性が存在することが推察される。このとき，深層心理学が表面に現れる美ではなく，その深層に着目したことは，臨床的な必要性に迫られた結果だと理解することが出来，美という現象に内在するなんらかの本質が，心理臨床という営みの本質と相容れない矛盾をきたすことこそが問題だと言える。冒頭でも述べたように，本来きわめて人間的な現象である美が，心理臨床と上記のような背反性を持つのは一体いかなる構造に根ざしたことなのであろうか。本論では，そのような美と心理臨床との背反性について検討することを目的としたい。

このような問いを立てるときに，本論で問題となる美とはいかなる美であるのかについて明確にすることは重要であろう。すなわち，朝台所に立って整然と並んだ食器棚を見て「きれいだな」と感じた美と，苦悩の只中でふと顔を上げたときに見えた溶解するような夕焼けの美とは，同じ「美」という語で表現されたとしても，体験的に全く異なるものとして実感されるように，美とは非常に様々な様相において広く現象されるものである。それゆえ，心理臨床と背反性を持つような美とはいかなる美であるのかについて明確にすることによって，美のうちのいかなる本質が心理臨床と背反性をきたすのかについて理解することが可能になるといえる。このとき，芸術療法における美について，もっとも明確な立場を取っている山中（1999）が，芸術療法において禁忌される美を「偽の美(6)」と表現していることは興味深い。「偽の美」もまた実際には美であり，ここで「偽」という否定を意味する表現が用いられているのは，心理臨床との背反性を意識したものだと考えられる。それゆえ，「偽の美」という美のあり方に着目することで，美に内在する心理臨床との背反性を備える本質について検討することが可能になると考えられる。次節では心理臨床との背反性を持つ「偽の美」がいかなる美であるのかについて明確にしたい。なお，筆者はここまで特に描画や箱庭などの視覚的な美を念頭において論を始めている。以降も本論では視覚的な美を主たる対象としていく。

2．「偽の美」

「偽の美」とはそれが心理臨床との背反性をもつゆえに，芸術療法において禁忌をうける美のあり方であるが，具体的にはいかなる美のことを指し示しているのであろうか。芸術療法におい

て美を志向することを禁忌した文献に沿いながら明確にしたい。

山中（1999）は芸術療法を始めると「通常はネガティブと考えられている，荒々しい表現や，暗く悲惨な表現」などが現われるが，一般的な芸術に対する思い込みから「いわゆる奇麗なもの，美的なもの(7)」が追求される懸念を表している。ここでは生々しいネガティブな表現に対比されるステレオタイプ的な「いわゆる奇麗なもの」が芸術療法において禁忌を受けていることが示されている。同様に中井(1985)は作られた作品に対するセラピストの構えとして「絵画や粘土などには正否はなく，"了解可能性"の限界もなく，また我々の立場からすれば巧拙もない(8)」こと，そして前述した「たどたどしい一本の線と，"芸術性"の高い完成画とを『哲学的に対等』と見なす（中井 1984)(9)」必要があることを強調し，「巧拙」や「たどたどしい」「完成画」などの美的価値にとらわれることを戒めている。以上の文脈より，芸術療法において禁忌を受ける「偽の美」とは，「一般的に合意・了解されているような整った形」としてイメージされていることが示唆される。すなわち，「偽の美」という語は「いわゆる」という語や括弧をつけて"芸術性"と示されるようなステレオタイプ的な美のことを意味している。それは個人にとって深い感動を伴うものではなく，むしろ誰しもにイメージされるような美であり，「巧拙」という語が示すように抑制された整った形を意味していると考えられる。このような美は，例えば食事の盛り付けに，身だしなみに，そして知能検査の描画など，我々が日常生活の中で自然や事物に求める存在のあり方だと考えられる。以上のような美のあり方を「偽の美」の実相としてイメージしながら，論を進めていくこととする。それでは，心理臨床との背反性をきたす「偽の美」に象徴される美の本質とはいかなるものなのであろうか。その検討を行うために，具体的に「偽の美」の判断が問題となる発達検査における「美の比較」課題に着目したい。

3．「美の比較」課題

「美の比較」課題とは，Binetによって創案された発達・知能検査の課題の一つである。その方法について，Binet,A&Simon,T（1911/1982）は以下のように述べている。

女性の絵を描いた6つのデッサンを用いる。それらの一方は美しく，他方は醜い。2つずつ顔を比較させ，そのたびに「この2つの顔のうち，どちらがきれいですか」と尋ねる。子どもは3度，正答しなければならない(10)。

「美の比較」課題は，Binetによる知能検査のうちの1911年の改訂版において初めて導入され，Binet式知能検査が普及するのに伴って，発達検査に適した課題として世界中で用いられるようになった課題である。本邦でも，鈴木・ビネー知能検査，及びK式発達検査などに導入されてきた。しかし，1990年代に至って，それが女性の美を判断させる課題であることが，性差別の観点から市民団体による抗議を呼び，『新版K式発達検査2001』では改訂時に正式に削除され，現在に至ってほとんど使用されることはなくなった。Binetが美の認知を検討するに当たって，女性の顔を素材として用いたのは，子どもの顔認知がまずは母親に対してなされることなどから，ある種の妥当性があったと考えられるが，現代社会においてそのような女性を品評するような課題のあり方が公的な場で使用されることは，市民感情とそぐうものではなく，廃止は時代の流れと

して必然的なものであったと考えられる。ただし，Binetが「この問題は哲学的観点からきわめて興味深い(11)」と述べているように，その倫理的問題とは別にこの課題は美に関する研究にとっては非常に示唆深い素材である。

「美の比較」課題では，原理的に正解があるはずがない「正しい美とは何か」という問題が呈示されている。ここでの「正しい美」とは「一般的な意味での整った形」を意味しているのだが，それは本論で取り上げている「偽の美」の特徴と合致する。すなわち，実際の図版を見ると，片方は典型的に整った顔立ちの女性が，片方には一部バランスを崩した女性の顔が呈示されており，この課題で問われているのが，個人にとっての個別的な深い感動をもたらす美の享受能力ではなく，「偽の美」のようなステレオタイプ的な美を共有する能力であることがわかる。それがステレオタイプという社会的に構成され，共有されるような美のあり方であるからこそ，この課題で正否の判定を要求することが可能なのだといえるだろう。そして興味深いのは，この課題が発達検査の課題として成立しうるように，成人にとっては共有されるのが当然であるステレオタイプ的な美が，発達のある段階に至って初めて子どもにも共有されるようになるという事実である。確かに，美とはクラシックな定義においては「目で見て快いもの」とされるように，子どもにとっても素朴に直観される現象である。実際に「美の比較」課題の達成以前にも子どもは，「きれい」という語を用いて対象を表現しており，美の体験を持っていると考えられる。しかし，「美の比較」課題に関するデータにおいては，「いわゆる」というステレオタイプ的なあり方で他者と共有される「偽の美」を，発達のある段階まで子どもは実感することがないことが示されている。子どもがステレオタイプ的な美を「目で見て快い」と実感するようになるには一定の発達が必要とされると考えられる。それゆえに，「偽の美」とは子どものある時期の発達において成立する心的構造をベースとして成立しうる現象であり，そのような心的構造について検討することで，クリアに「偽の美」という現象の本質に迫ることが出来ると考えられる。

では，そのような時期とはいつ頃なのであろうか。そのことについて本論で調査を行う必要はない。「美の比較」課題という発達検査において広汎に用いられて，データが集積されてきた課題に着目したことによって，本論では実証的な結果を得る段階を省くことが出来る。本論では現在までに蓄積されたデータを事実として出発し，そのような事実を考察していくことによって，「偽の美」の本質を検討していくこととする。

「美の比較」課題については，『新版K式発達検査2001』（生澤 1985）(12)のデータが公開されている。それを参照すると，「美の比較」課題は，2歳過ぎから達成されはじめ，3歳2ヶ月には50％の子どもに，3歳8ヵ月には75％の子どもに，4歳を過ぎるとほとんどの子どもに達成されるようになる。発達には個人差が不可避的に伴うので，「美の比較」課題を行うことが可能になる時期には多少の拡がりがあるが，それらはほぼ正規分布を示している。それゆえ，平均的な達成時期である3歳初期の発達的変容によって「美の比較」課題を達成することが可能になるよ

---

1 本来は実際の図版を掲載することによって，本論で取り扱われている「偽の美」が鮮明にイメージできると考えられるが，実際の臨床的検査で用いられている可能性がある都合から，それが適わなかった。Binet,A&Simon,T（1911/1982），あるいは改訂前の新版K式発達検査には，それらのカードが含まれているため，入手できる環境にあれば，そちらを参考にされたい。図版の掲載に関して，丁寧に対応してくださり，貴重なご教唆を頂いた京都国際社会福祉センターの大谷多加志氏に感謝します。

うな心的構造が成立すると考えられる。そこで三歳初期の発達的な変化・変容について検討を行い，そのことによって「偽の美」がいかなる心的構造に基づくものであるのかの考察を行うこととする。

4．3歳児の飛躍

それでは，3歳とは一体いかなる発達の時期なのであろうか。その大きな特徴として，言葉の急速な発達をあげることが出来る。子どもは1歳頃に初語を発した段階から語彙数を着実に増やしていくが，3歳頃にはそれが急激な伸びを見せ，基本的な文法を獲得するに至るとされている（岩田 1998）[13]。Gesell（1940/1966）が述べているように，この時期になって，言葉は意味や概念を伝えるものとして機能するようになることから，会話技能にも質的な変化が起こり，子どもの生きる対人関係世界は大きく変容していくことになる[14]。すなわち，自他未分化な状態から「私」と他者が分化して成立し，「3歳児は，自分も人間だが，相手も人間だということをはっきり知って」，「自分というものが，他人の中の一人の人であることを次第に強く自覚する（Gesell　1940/1966）[15]」ようになる。このような質を持つ対人関係世界の結果として，第1次反抗期などが現れるが，同時に他者にも心があることを理解するという「心の理論」の獲得がなされていく（Astington 1993/1995）[16]。そのような他者理解は，社会のルールを守るという自制心の発達を促すものとなり，ひいては善悪を知るという道徳性への開けを準備するものとなる（園原・黒丸 1966）[17]。

以上簡略に概観したように，3歳とは発達における大きな変容の時期である。Gesell（1940/1966）は3歳児を総括して「3歳という年は楽しい年である。嬰児期は2歳児を持って終わり，次の一段と高い広場が明けてくる(…)心理的にいうと，3歳児の心理は，2歳児のそれよりも，4歳児の方によりよく似ている[18]」と述べている。ここで的確に表現されているように，3歳児とは飛躍の時期であり，それはそれ以前の時期とは断絶した質的な発達の時期である。このような質的な発達に伴って，「美の比較」課題が達成されるようになり，「偽の美」のような美を理解することが可能になる。すなわち，上述した様々な対人関係世界の変容と「偽の美」の理解とは通底した発達をベースとするものであると考えられる。それゆえ，そのような変容をもたらす3歳児の飛躍における発達の本質を検討することで，「偽の美」の本質について理解することが出来ると考え，次節以降ではそのような飛躍の内実について検討を行うこととする。

5．二者関係から三者関係へ

前述したように3歳とは，飛躍的な発達をなす時期であったが，そのような質的な断絶を持つ発達を捉えるためには，発達段階に着目するのが有効であろう。すなわち，永野（1987）が発達を捉える枠組みとして，学習の積み重ねによる量的で連続的な発達論と，構造の変容による質的で非連続的な発達論とに大別しているが，後者の発達論を構成するのが発達段階である[19]。発達段階にあっては，各段階がそれぞれに異質で独自な構造を持っており，それゆえある時期の独自性を記述することに適する。3歳児の飛躍とは，それが飛躍であるゆえに発達段階に着目することが有効だと思われる。中でも本論では特に精神分析による発達段階に着目してみたい。

精神分析の発達段階論とは，主に性愛がいかなる器官を中心として体制化されているのかに着

目して描かれたストーリーであり，口唇期から始まり，肛門期，男根期を経て，潜伏期を通って，性器期に至るという段階が呈示されている。本論で問題となっている3歳児という時期は，ちょうど肛門期から男根期への移行の時期にあたっている。肛門期とは1歳半に始まってから4歳にかけての時期であり，男根期とは2歳半から始まって5歳頃までの時期だとされている。3歳児とはこの2つにまたがった期間であり，ある心的構造から他のそれへの変容していく時期である。それゆえに，前述した飛躍が3歳児において生起するのだが，そのような飛躍を理解する上で二つの心的構造の差異を検討することが有効だと考えられる。ここで，そのような差異を検討する上で有効な概念として，エディプス・コンプレックスを挙げることができる。エディプス・コンプレックスとは，二つの相容れない心的構造が引き起こす矛盾と葛藤を概念化したものであり，それが両者の矛盾において生起する現象であるゆえに，その差異をクリアに呈示してくれる。

エディプス・コンプレックスとは，Freudによって「発見」された概念であり「父を殺し，母を犯したい」とする欲望をめぐる葛藤を意味するものである。このとき，主に性欲動の観点からFreudはエディプス・コンプレックスを定義しているのだが，近年になってむしろ対人関係という観点から，エディプス・コンプレックスの意義が再発見されている。中でも明快な定義を行っている岡野（1998）は，エディプス・コンプレックスを「二者関係において自分の欲求を満たすために，それを阻止する第三者を排除したいという状況で繰り広げられる様々な葛藤[20]」としている。ここでは二者関係という対人関係のあり方と，そこに加わった第三者を含めた三者関係という対人関係のあり方との葛藤が見出されている。二者関係とは母子関係を代表的なモデルとするような自他の分離が不十分であるような関係のあり方であり，肛門期までの子ども，及びボーダーライン水準の人格において特徴的な関係のあり方である。これに対して三者関係とは，母子関係に介入する父親を含めた関係をモデルとしており，男根期以降に新たに導入され，神経症水準の人格に特徴的な関係のあり方である。前節で3歳児の発達の特徴として第一次反抗期をあげたが，これはまさに二者関係の特徴であった母子が密着した自他のあり方から，分離した自他へと進んだことを示す現象であり，3歳児の飛躍における心的構造の変容として，二者関係から三者関係へという対人関係のあり方の変容を見出すことが出来る。そのような対人関係のあり方の変容とは，子どもが二者関係的な他者（二人称の他者）ではない，三者関係的な他者（すなわち，三人称の他者）と遭遇することによると考えられるが，このときそもそも子どもの側に三人称の他者と出会うことの出来る心的構造が必要とされるだろう。すなわち，それまでは二者関係において現象される他者のみしか認知し得なかった子どもが，三人称の他者と出会うことが可能になることこそ，二者関係から三者関係への変容に根ざす本質と考えられ，ひいては「偽の美」の認知を成立させる本質だと考えられる。次節ではそのような三人称の他者の成立について検討を行う。

6．超自我と自我理想

三者関係を構成する三人称の他者の出現はエディプス・コンプレックスを準備するものであったが，エディプス・コンプレックスはその最終解決として子どもに超自我を内在化させることになる。超自我の内在化とは，時期として5歳頃に起こるものであるが，そこで内在化されたのは，まさに葛藤を引き起こしていた三人称の他者である。すなわち，外界に存在する他者としての三

人称の他者は，超自我として内在化され，エディプス・コンプレックスを解決することとなる。それゆえに，超自我の性質を検討することによって，我々は問題となっている三人称の他者について理解することが可能になると考えられる。

Lemaigre（1993/1997）に拠れば，超自我とは「良心，禁止，罪悪感，さらには定言命令[21]」を司る心の審級であり，自我の活動を監視する機能を担っているとされている。このような超自我の性質は，しばしば「罰する父」としてイメージされ，まさに母子関係に介入する父が三人称の他者という他者のあり方の根源的イメージとされている。また，超自我とは表裏の関係にある自我理想は，「自我を観察し理想に照らし合わせて評価する」心の審級である。自我理想とは評価の基準を与えてくれる父であり，いわば「背中を見せて導く父」というイメージを持つものである。自我理想は超自我とそのニュアンスを違えているが，同様の心の審級に位置するものであり，三人称の他者の性質を強く反映した概念だと考えられる。自我理想と超自我は，それが社会・共同体を象徴したものであるという点で同根の概念である。すなわち，超自我が下す禁忌も，自我理想が与える理想も，ある特定の個人の性向を反映したものである以上に，社会や共同体の道徳性や価値体系が象徴されたものである。これは前述した岡野（1998）がエディプス・コンプレックスについて，「エディプス葛藤とは現実原則に従うこと，つまり法や象徴，ないしは言語の世界に入ることにまつわる葛藤[22]」であるとして，「法や象徴，ないしは言語」という共同体が構成する価値体系こそを三人称の他者の本質としていることからも支持されよう。エディプス・コンプレックスの提唱当時から，父というイメージが三人称の他者の根源に位置しているが，ここでの「父」とはまさに共同体の象徴として母子関係に切れ目を入れる「父」なのである。実際に，防衛機制のうちでも美を産出する可能性を持つ昇華とは，自我理想に照らしながら行われる防衛機制であるが，昇華が「適応」的な機能を持つのは，自我理想が与える理想が共同体において共有されているものだからだと考えられよう。

以上より，三人称の他者という他者のあり方は，共同体の価値体系を象徴していることをその本質としており，そのような他者とは具体的な人間というよりも，むしろ抽象性こそを原理とするものだと考えられる。そのような抽象性とは，言語の飛躍的な発達を基底とする3歳児の飛躍において獲得されるものだと考えられ，まさにその時期に新たに組み入れられる他者のあり方なのであろう。それまで二者関係という具体的な人間を他者とする対人関係のあり方から，そのような抽象性を持つ共同体を象徴する他者と出会えるようになることこそが，我々が問題としている3歳児の発達における心的構造の変容といえるであろう。それは子どもが共同体というものを意識することが可能になったことを意味しており，そのことは「偽の美」の本質となっていると考えられる。次節では，そのような共同体へと開かれた意識がいかにして「偽の美」の本質を構成するのかについて検討を行う。

7．コモンセンスの方へ―Kantの無人島

前節では，三人称の他者が共同体を象徴する他者であることについて論じてきた。共同体を象徴する他者とは，まさに共同体で共有されている意識のあり方を備えた他者であり，そのような意識のあり方は通常「常識」という語で表される。常識とは単なる共有されている知識の総体を意味するものではなく，それが"Common Sense コモンセンス"の訳語であるように，共同体の

成員において共有されるセンス（感覚）を意味する概念である。コモンセンスについては，Aristoteles以来の長い探求の歴史があるが，それは美を感じることを基底の部分で可能にするものであり，本論の主題である「偽の美」を理解する上で重要な概念である。

中村（2000）が述べているように，コモンセンスには知覚面と社会面の二つの意味が含有されている。より早くから注目されてきたのは知覚面でのコモンセンスであり，「人間のいわゆる五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）にあいわたりつつそれらを統合して働く全体的なセンス[23]」と定義される。知覚面でのコモンセンスはAristotelesが特に問題にした概念であり，「ピンクは甘い」と証言する共感覚者が特徴的に示しているように，諸感覚は個々別々に感覚されるだけではなく，例えば視覚と味覚の間でそうであるように，相互に比較や識別が行われ，綜合されることによって生きた実感にもたらされる。これは共感覚者にのみ実感されることではなく，風鈴の音を聞いて涼しいと感じるように我々にも日常的に実感される。一般に絵画や造形は視覚芸術とされて，音楽などは聴覚芸術とされる。確かに絵画の美は視覚を用いずには享受し得ないし，音楽もまた聴覚抜きには享受し得ない。しかし同時に，絵画の美とは視覚のみによって享受されるものでもないし，音楽の美もまた同様である。感覚器官において感受された像は，コモンセンスを介して生きた実感を与えられ，そこにおいて美が現象される。このようなコモンセンスの働きを，Blankenburg（1971/1978）は機能不全を起こした統合失調症者の語りによって逆説的に示した。

何かを意識的に眺めているのに，それが私に働きかけてこないのは恐ろしいことです。それが偽者のように見えるのです。実質がなくなってしまうのです(患者G)[24]。

患者Gは，対象を視覚的な像として認知することは可能であるのに，対象の持つ心に響きかける感性的な様相に触れることが出来なくなっている。美とはまさにそのような感性的な現象であり，コモンセンスの機能不全によって，人は美という存在の相から隔絶されてしまうことが示唆されている。同様にBlankenburgのアンネラウという患者は，自らが着るドレスを選ぶことに困難を示すことが報告されている。アンネラウは「どんな生地がどんなドレスにどんな場合に合うのかということで色々迷ったときには（…）徹底的に理詰めで解決[25]」しようとして，ファッションという美を原理とする営みに対して論理によって適応しようとする。ここではコモンセンス不在の絶望的な試みが端的に表されている。Blankenburgはこのような美という存在の相への接近を可能にするコモンセンスについて「（ある特定の文化圏の内部で）あらゆる人にとって妥当する事柄を自己の自発性の側へと引き受け，その事柄が相対的に自己に属することとして，まったく自明性を持って[他者との]共同世界のうちにおかれるようにする[26]」能力だと説明している。ここでは，コモンセンスの知覚面が，共同体において共有されるという社会面と不可分に結びつけられている。すなわち，美を感じるという一見知覚的な現象は，他者との共同世界の自明性に支えられた現象だとされている。このような美が共同体の存在をベースとすることを大きなテーマとしたのがKant（1790）の『判断力批判』である[27]。Kantは個人にとって美が現象しうる，その可能性について，以下のメタファーで鋭く指摘している。

私が無人島に住んで，二度と人に出会うという希望を絶たれているとしたら，また自分が望みさえすれば，魔術を使ってかかる壮麗な建物を立ちどころに現出させることが出来るにしても，安楽に一身を托する小屋を持っている限り，そのようなことのためにあたら心身を労使はしないだろう(28)。

このメタファーでKantは，人は無人島に住むときには，美を志向しはしないと述べているのだが，我々はこのメタファーを原理的なこととして受け取る必要がある。なぜならロビンソン・クルーソーが示しているように，実際に無人島で暮らしたとしても，人はその生活に美的なものを求め続けるからである。Kantの無人島とは，物理的な意味での無人島ではなく，心理的な意味での無人島である。心理的な無人島とは，主体にとっての他者不在の状況を意味している。ロビンソン・クルーソーのように，故郷を思って（内的な他者に向けて）美を求める心性が存在する限り，彼はKantの示す無人島に生きているわけではない。むしろ全くの内的他者の不在こそがKantの無人島であり，そこにおいて美が存在することの不可能性をKantは主張しているのである。他者不在の状況における美の不可能性とは，美がコモンセンスを通してのみ現象されうることを根拠としている。Kantは，コモンセンスの本質を「自分自身を他者の立場においてみる(29)」こととしているが，それゆえに美とは「他者の立場」になって初めて感じられるものなのである。ここにおいて，無人島における美の不可能性が了解されうるだろう。すなわち，無人島における他者の不在は美を存在させる基底の剥奪なのである。

以上述べてきたように，美とは他者の立場への同一化を一つの原理として現象されるものである。このときの他者とは誰だろうか。本論で入念に検討してきたように，3歳児の飛躍以前には二者関係における他者しか存在しなかった。Gesell（1940/1966）は子どもにおける美の生成について，母親が「きれい」というものをなぞるように，子どもが「きれい」と言い始めることを述べており，3歳児の飛躍以前には，眼前の他者に添う形で美が感じられ始めることが示唆されている(30)。しかし，上述の議論から考えるに，この時点で感じられているのは，我々が通常用いている語の意味での「美」ではなく，むしろ「快」という語に近い体験の質だと考えられる。3歳児の飛躍を経て，三人称の他者を他者のあり方として受け容れ始めるとき，子どもは共同体を象徴する他者に自らの身を置くことが可能となり，美を感じるようになる。この段階に至って，「美の比較」課題で示されるような「偽の美」の理解が可能になるように，「偽の美」とはまさに共同体における価値体系に即した美のあり方といえ，それは「偽の美」がステレオタイプ的な「いわゆる」という美であったことからも了解されうるだろう。すなわち，美とは共同体の立場に立つことを一つの不可欠な本質とする現象であるが，「偽の美」とは様々な美の様相の中でも，そのような本質によって全面的に彩られた美のあり方だといえよう[2]。このような理解に立つとき，ようやく心理臨床と美の背反性について考察することが可能になる。

---

[2] 同一対象に対しても個人個人によって美の感じられ方が異なるように，美とは一方できわめて個別的な現象でもある（それゆえに人間的といえる）。共同体の価値体系への同一化という本質のみでは美のそのような個別性については説明がつかないことには留意する必要がある。美にはそれとは異なる本質も一方で内在されていると考えられるが，「偽の美」においては共同体の価値体系への同一化が非常に強く前面に現れているのだと筆者は考える。なお，もう一方の本質については，本論の終わりで若干触れている。

8．ふたたび，「偽の美」

以上の議論より，芸術療法で禁忌を受けてきた「偽の美」とは，共同体を象徴するような他者である三人称の他者の立場において感じられる美のあり方であった。このことを踏まえて，心理臨床と美の背反性について検討を行う。

心理臨床で用いられる表現方法のうちでも，箱庭は最も手軽に美しく作りやすい媒体であろう。箱庭で用いる各アイテムを検討した木村（1985）は，植物には箱庭を美しく飾り立てる効果を持っており，そのことは同時にそれが防衛的な意味を持つことを述べている[31]。防衛的であることは，本来の心のあり方を，セラピストとの間で表出することを避けるという意味合いを持ち，それは心理臨床という営みにとって否定的にも働きうるが，同時にクライエントの心が崩れ落ちないように守るという意味では肯定的な働きも持っている。ここで重要なことは，「美しく飾る」という「偽の美」を意識した表現行為においては，それが「偽の美」という三人称の他者の立場において現象される美のあり方であるゆえに，クライエントの表現はセラピストという二人称の他者ではなく，三人称の他者（共同体）に向けたものになるということである。それゆえに，本来クライエント―セラピストの二者関係においてなされるはずの表現は，三者関係的な表現とならざるを得なくなり，その表現は心を隠すような防衛的な意味を持つことになる。しかし，前述したように防衛的な表現とは，クライエントの心を守る役割をも果たし，それが自然な流れの中で行われている限りは，心理臨床の一つのプロセスだと言える。むしろ，そのような美しいものが表現されたときに，美の本質を踏まえてクライエントの心の動きに気を配ることこそ臨床的な姿勢といえよう。

心理臨床と美との背反性とは，むしろセラピストがクライエントの表現に対して美という観点に着目して受け止めることにあるだろう。これは山中（1999）や中井（1984）が芸術療法における美の禁忌を述べるときに，セラピストの姿勢について禁忌をなしていることからも明らかであろう。セラピストが美を意識した姿勢を持っているとき，セラピストは自らを心理臨床の関係性から離れた三人称の他者に置いていることになる。このときの三人称の他者とは，面接室の外側にある共同体や社会を象徴するものであり，それはクライエントが生き難さを感じている「暮らし」の場を構成するものであろう。心理臨床という関係性を通じた癒しへの試みの場においては，クライエントは眼前のセラピストに向けて，すなわちその関係に根ざして表現を行うのであるが，そのような表現を受け止めるべきセラピストが，美を意識することによって三人称の他者の立場にあることは，クライエントの表現を外の世界へと晒すことを意味し，クライエントを傷つけることになりかねない。そもそも関係を無視したセラピストの態度においては，表現行為自体の持つ臨床的な意義が捨象されることとなる。山中（2003）は，表現病理学が治療的な展開を見せなかった理由として，作品が「誰に対して」表現されたものであるのかという視点を失っていたことを鋭く指摘しているが[32]，これは作品の美的価値に重きを置くことによって起こる必然的なことだったといえよう。美を意識するとき，クライエントの表現は社会的な価値体系の上で品評される存在となり，そこでは表現者とその受け手であるセラピスト・クライエント双方の人間的な個別性が心理臨床の場において切り捨てられることになってしまう。そのような状況にあっては，表現は個人の手元から離れ，関係性のもとから剥奪されてしまうことになる。そのことは心理臨床という営みの根幹に関わることだと考えられる。それゆえ、Freudは作品の美的価値に心

を奪われるのではなく、そこに表現された意味内容を作者の個人史に即して解釈することに専念したのであろう。すなわち，Freudはそのような姿勢に立つことで，表現を個別性を持った個人のもとへと取り返すことを可能にしたのだと考えられる。町医者として臨床的意義を常に求められたFreudだったからこそ，表層に現象される美ではなく、その背景に焦点を当てることが、クライエントとの関係性や双方の人間としての個別性を捨象することのない方法であることを理解しえたのではないか。

以上述べてきたように，美と心理臨床の背反性とは，それが対人関係のあり方をめぐる矛盾に根ざすものであった。すなわち，「偽の美」に端的に現れているような美に内在する三者関係的な本質が二者関係的な本質を備える心理臨床的な関係性を破壊する形で機能してしまうことが，本論を通して示された。

9．終わりに―エロス的な美に向けて

本論では美がいかなる本質を持つのかについて検討し，心理臨床と美の背反性について明らかにしてきた。それでは、美には臨床的な意義が存在し得ないのだろうか。最後に今後の展望として，心理臨床にこそ現象されうるような美のあり方について若干触れたい。

本論では「偽の美」に焦点を当てたが，三人称の他者の立場に身を置くという美の本質を端的にあらわしたのが「偽の美」であった。しかし，美とは極めて多様な現象であり，「偽の美」に象徴されるような関係を捨象するという本質のみならず，むしろ関係の中でのみ立ち現れるような美もまた存在していると考えられる。岡田（1993）は箱庭療法の進展の中で作品が美しく仕上がってくることの不思議さを指摘しており(33)，山中（1999）は面接において心が「自然な流れ」をつかんだときには，その「表現」が「美的な」様相を取ってくることを述べ，「偽の美」と対比される「真実の美」に言及している(34)。そして，転移・逆転移の場面で，互いの身体・容姿を「美しく」感じるような事態も確かに心理臨床の場で生起してくる。ここでは面接の進展，すなわち深まっていく関係性を生きるプロセスの中で，美が現象されてくることが示唆されているといえよう。美の神アフロディーテの息子が愛の神エロスであったように，美とは愛（関係性）と分かちがたく結びつくという本質を一方で備えている。そのような美のエロス的な側面に着目することによって，心理臨床という関係性を生きる営みに美を取り戻すことが出来るのではないだろうか。そのようなエロス的な美とは，クライエントとセラピストの関係性に根ざして現象され，同時にその基盤である関係性を変容させる契機となりうる美のあり方だと考えられるが，この問題は現在の筆者の力を大きく超えた問題であり，今後心理臨床実践の中で考え続けていくべき課題だと思われる。

引用文献

(1) 竹田青嗣(1997)：エロスの世界像．講談社学術文庫
(2) Freud,S(1914)：Der Mose des Michelangelo(高橋義孝他訳(1969)：ミケランジェロのモーセ像 IN　フロイト著作集第三巻 人文書院 p292)
(3) 山中康裕(2003)：たましいの形　山中康裕著作集５巻　岩崎学術出版社
(4) 中井久夫(1984)：中井久夫著作集Ⅰ巻　精神医学の経験―分裂病　岩崎学術出版社
(5) 山中康裕(1999)：心理臨床と表現療法　金剛出版

(6) 山中康裕(1999)：上掲書　p 10
(7) 山中康裕(2003)：上掲書　p2
(8) 中井久夫(1985)：中井久夫著作集Ⅱ巻　精神医学の経験―治療　岩崎学術出版社 p178
(9) 中井久夫(1984)：上掲書　p18
(10) Binet,A.&Simon,T.(1911) ：A method of measuring the development of the intelligence of young children(中野善達・大沢正子訳(1982)：知能の発達と評価―知能検査の誕生　福村出版 p253)
(11) Binet,A.&Simon,T.(1911) ：上掲書 p253
(12) 生澤雅夫編(1985)：新版K式発達検査法―発達検査の考え方と使い方　ナカニシヤ出版
(13) 岩田純一(1998)：「わたし」の世界の成り立ち　金子書房
(14) Gesell(1940)：The first five years of life―a guide to the study of the preschool child, from the Yale clinic of child development(山下敏郎訳(1966)：乳幼児の心理学―出生より5歳まで　家政教育社)
(15) Gesell(1940)：上掲書　p83
(16) Astington,J.W. (1993)：The child's discovery of the mind(松村暢隆訳(1995)：子供はどのように心を発見するか―心の理論の発達心理学　新曜社)
(17) 園原太郎・黒丸正四郎(1966)：三才児　日本放送出版協会
(18) Gesell(1940)：上掲書　p77
(19) 永野重史(1987)：解説IN　Kohlberg,L.(1969)Stage and sequence-the cognitive developmental approach to socialization(永野重史監訳(1987)：道徳性の形成―認知発達的アプローチ　新曜社)
(20) 岡野憲一郎(1998)：恥と自己愛の精神分析―対人恐怖から差別論まで　岩崎学術出版社　p 155
(21) Lemaigre,B.(1993)：Surmoi IN Kaufmann,P(1993)：L'apport freudien(佐々木孝次監訳(1997)：フロイト・ラカン事典　弘文堂 p215)
(22) 岡野憲一郎(1998)：上掲書　p156
(23) 中村雄二郎(2000)：共通感覚論　岩波現代文庫　p7
(24) Blankenburg,W.(1971)：Der Verlust der naturlichen Selbstverstandlichkeit－Ein beitrag zur Psychopathologie Symptomarmer Schizopjrenien(木村敏・岡本進・島浩嗣訳(1978)：自明性の喪失―分裂病の現象学　みすず書房)　p144
(25) Blankenburg,W.(1971)：上掲書　p137
(26) Blankenburg,W.(1971)：上掲書　p188
(27) Kant,I.(1790)：Kritik der Urteilskraft（篠田英雄訳(1964)：判断力批判（上・下）岩波書店）
(28) Kant,I.(1790)：上掲書　p73
(29) Kant,I.(1790)：上掲書　p232
(30) Gesell(1940)：上掲書
(31) 木村晴子(1985)：箱庭療法―基礎的研究と実践　創元社
(32) 山中康裕(2003)：上掲書
(33) 岡田康伸(1993)：箱庭療法の展開　誠信書房
(34) 山中康裕(1999)：上掲書　p10

（臨床心理実践学講座　博士後期課程1回生）

（受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日）

The Exclusiveness between Psychotherapy and Beauty: Discussion on "False Beauty"

TOWHATA Kaito

The present paper aimed to examine the structure of the exclusiveness between psychotherapy and beauty, focusing particularly on "False beauty", which is strictly avoided in art therapy. Since children start to perceive "False beauty" at the age of around three, it was possible to study the psychological development of children of this age, leading to the detection of the consciousness of children toward the human community. Based on these characteristics of "False beauty", it is inferred that beauty has the nature of a triangular relationship and may interrupt the therapist-client relationship which needs to be operated in a dyadic manner. Finally, future research topics are presented.